



「TDC若手支援セミナー デンタルナビゲーション」 ～研修医から臨床医へ～

海外歯科事情と留学

菅野 文雄

この度は、貴同窓会、若手支援セミナーにお招きいただきまして、ありがとうございました。お話をいただいた時に“若手支援”という言葉に若干、抵抗はあったものの、最近いつの間にか“最近の若い人は・・・”と言われる立場から、言う立場が変わってきたことを改めて実感した次第です。私が母校を卒業した1987年は、バブル絶頂期で現在の社会、経済情勢とは異なり、歯科界の状況も大学の教育現場や研修システムのことも含めて大きな違いがあると思います。また個々のおかれている環境や適性などによっても歯科大卒業後の選択肢は多岐にわたると思います。当然正解はない問題なのですが、以前から“卒後5年ぐらいの経験が歯科医としての基本を作る”とよく言われます。“三つ子の魂百まで”的な話だと思いますが、個人的には同感するところがあります。少し前置きが長くなりましたので、本題に移りたいと思います。

留学といっても目的や場所、期間によってその形態は多岐にわたることは想像できると思います。その中で米国で日本の歯科医師免許のみでこの分野で臨床ができるということになるとポストグラデュエートのプログラムに所属するのが正統派と言えると思います。ポストグラデュエートは通常、大学院と訳されますがいわゆる日本の大学の、主に博士号の習得を目的とする大学院とは異なったものと理解してください。この中には専門医（口腔外科を除く）の資格を目的とするコースや短いものでは日本のGPの研修医と同じようなコースがあります。このようなコースは通常1年以上の期間がかかりますが、もし実際に患者さんの治療に当たらなくてもよいというのであれば、正規のコースだけではなく、Visiting Scholarを受け付けている場所もあります。また留学という言葉が当てはまるかどうかは微妙ですが、数週間程度のプログラムは歯科雑誌をめくれば、最近では西海岸の大学を中心に数多くのプログラムが用意されています。米国以外でもスウェーデンのイエテボリ大学などを卒業された先生がたもご活躍されています。

留学を経験すると、まずよく聞かれるのが**“留学されてどうでした？”**という質問です。あまりにもアバウトすぎる問いかけなので返答に困るのですが、おそらく留学をして後悔されている先生はいらっしゃらないと思います。アカデミックな面から考えると、現時点で留学しなければ習得できない技術はないと思います。裏を返せば国内のレベルが海外に比べ劣ってはいないということです。つまりわざわざ留学する必要はないという極論に達します。では今留学を勧めないかという、少しでも興味があって、時間的、経済的な状況が許されるならば、やはりお勧めします。これは留学のあたりまえの一般論になってしまうのですが、客観的に物事を見直すことができるからです。”日本の常識が世界の非常識“のようなこともあるでしょうし、私たちの分野だけではなく多くの面で日本の良いところ悪いところが見えてきます。このことが帰国後にどれだけの価値があるかといわれると、人生の哲学的な話になるのでやめておきますが、とても貴重な経験だと思います。

もうひとつメッセージを送るとすれば、英語を勉強しましょうということです。これは留学するしないに関わらず、将来必ず役に立つと思います。今必要ないからといって、今後必要にならないとは言いきれません。最近では国内一般企業でも英語でコミュニケーションをとろうという試みもされています。賛否両論あるとは思いますが、高校生の頃から英語コンプレックスだった私のような者があえて言うのですから信じていただければ幸いです。